

V. 「宇宙文化学」の展開

—人文・社会科学コーディネータの観点から—

独立行政法人 宇宙航空研究開発機構 大学・研究機関連携室
人文・社会科学コーディネータ 石崎恵子

1. 本稿の目的

神戸大学 JAXA 連携講義は、モデル講義という性格も併せ持っている。そのため、コーディネータとしては、授業のつぎの展開をも考察する必要がある。本稿では、人文・社会科学コーディネータの立場から「宇宙文化学」の展開を考察する。なお、新しい学問分野としての「宇宙文化学」の今後の展開は、岡田先生の論考「5. 「宇宙文化学」の創造——文化人類学の観点から」を是非ともご覧いただきたい。

ここでは、「宇宙文化学」講義のねらいである、①基礎教養教育、②研究調査能力養成、③人材育成、これらをいかに活性化するかを通して今後のコーディネート方針を記す。

2. 基礎教養教育の展開

文系・理系との分離が前提となっていた 20 世紀日本の教養教育を超え、21 世紀に必要な「学際的基礎教養教育」として「宇宙文化学」を活性させるためにはどのような取り組みが必要かについて、ここでは考察してみたい。

今回、学生たちから提出された成果からは、みずみずしい教養が伺われた。これは学生たちが既に習得している教養に、宇宙に関する知識が加わったことでさらに強化されたといえることができる。つまり、神戸大学生のポテンシャルの高さに依るところが大きいですが、講師が知識を授け、学生も自ら調査するという授業設計による効果でもあった。

学部教育の性格上、受講生の多くは研究者の道へ進まずに就職するか、若しくは、宇宙とは関係ない分野へ進学することを前提としなければならない。このような多くの学生にとって、教養としての意義を高めることは重要である。これは授業内で大いに達成できることであり、実際にその効果は得られたと言えよう。

さらなる方針として明確にするならば、リテラシー教育としての授業内容の充実という点である。つまり決して特定の思想を教え込むのではなく、あらゆる見方を提示し自ら吟味し考えることを促す授業である。これこそ広大な宇宙という対象をめぐる授業にふさわしい。優秀な学生たちである故もあってか、主体的な判断というよりは、JAXA や大学側の評価に即した回答を見つけようとする傾向が多く見受けられた。この点に関しては、日本文化にも関わるものとも考えられ、さらに検討・研究を進めてみたい。いずれにせよ、知識をインプットすることは何よりも基礎教養教育として重要である。

こうした観点から、次年度は、試験的に、レクチャー回を増やすこととなる。プレリサーチグループ発表および見学ツアーは継続するとして、最終発表会は除き、レポートの執筆に集中するという方針が神戸大から提案された。レポートにおいて共同研究が推奨されることで、グループ体験学習の要素は損なわれない。共同研究は、学者の世界でもしばしば行われるもので、この方法を疑似体験することは、たとえ学者の道に進まずとも、学問探求の一端に触れる基礎教養に繋がるであろう。今期に行なったグループ発表という体験学習も非常に有効なものであったが、半期でこれら全てを賄うことには限界があり、効果の重点化という観点からも、この方針となった。

以上のように、学生たちの限りない可能性を伸ばすため「宇宙文化学」が貢献できるような教育内容をこれからも充実させていく。本講義を通して、学生たちが各々進んだ先でさらに活躍するために、有用な教養となる授業を特にリテラシーに特化する必要がある。

3. 研究調査の展開

「宇宙はなぜ美しいのだろう。美しいと思わない人々もいるのだろうか。」——「宇宙文化学」ではたとえばこのような素朴な疑問についても学問的な研究調査を行い、さらには私たちの認識まで変え得る視点を提示してくれることが期待できる。これは学問全体にとってのブレークスルーとなることは間違いない。では、特に JAXA としてはどのようにコミットできるだろうか。

基本的に、JAXA が掲げる経営理念に通底している「社会貢献」「課題解決」に資するものであれば積極的に支援することができる。これは、公費を使って研究をする上での使命である。ただし、その上でも提案したいのは、自発的な興味関心に根差した研究能力の開発であるということである。個々人の自発的な動機による研究は、最も生産性・創造性が高い。しかし、「自発性は、他者に求められて生まれる」という循環関係が存在する。このことはグループ学習の有効性の背景となっており、また異文化コミュニケーション研究を意義深いものに行っているものの一つであろう。だが、どのような他者に求められるか、どのような社会に求められるかによってもこの循環の内容は異なってくるのも事実である。他者や社会が向かう方向性によっては、リスクもあり得るのだ。これは、あらゆる人々の生活に関わる公共性を考える上で決して見逃せない視点である。「社会貢献」を掲げる上でも、文化研究を通して「社会貢献とはいったい何か」「何が課題の解決にあたるのか」といった内実を明らかにした方がより一層の貢献に繋がるはずだ。

たとえば、もともと人工衛星は既に、社会的課題の解決のために開発された側面が強い。一方で、宇宙探査などは、いわゆる狭い意味での「社会的課題」というよりは、個々の「自発的な関心」に基づいている所にその魅力があるとも言える。そして、結果的に人々を勇気づける社会現象となり、広い意味での「社会的課題」を解決するという思わぬ副産物もあった。社会の支持を集めるためだけに行なっていたとしたら果たしてこのような結果となっただろうか。解決を志向せずして何かの解決になるという現象自体、われわれの社会において

はよくあることである。宇宙開発と社会・文化との関係を考える上では、こうした現象にまで目を配る必要がある。それにはやはり、個人固有の興味関心から調査研究を進めることが最もやりがいがあり、かつ成果が大きいはずだ。

前提として、文化研究の意義はそれ自体で価値あるものであり、何かの課題を解決するためのものではない。また、文化現象を「課題」や「問題」として捉えること自体にも注意が必要である。たとえば、異なる文化が自らの文化にとって受け入れがたいものであった場合、それに干渉したり評価したりするべきか、といった文化人類学における相対主義論争も授業において紹介された。だが一方で、宇宙開発に繋げる際には、是非とも、実態を把握するばかりでなく、それを活かせる展開を期待したい。たとえば、文化人類学者の類稀なる行動力による入念な調査は、各地の宇宙に関わる産業構造および技術の伝承についての調査や、地域文化による宇宙開発の受け入れ状況など、実際の宇宙開発を行う上で得難い確かな情報と分析成果として運営に活かすこともできるだろう。

また、岡田教授によれば、文化人類学の見地からは、宇宙を想像することは我々の社会の未来を想像し創造することであり、夢と現実との相互作用によって我々の宇宙イメージが形作られている例が随所に見出せるという。阪本教授もまた、宇宙は現実と夢との両方を含みこむ求心力があると指摘していた。そして、各授業では、あらゆる人々の現実の生活に宇宙が無縁の存在ではないという指摘もあった。このように、宇宙開発は、夢と現実というしばしば対立し分離して考えられがちなものを、「夢を実現する」という形で推進してきた。

だがその「夢」が何であるのか、すべての人々に共有されているのか、またそれは良きことなのか、という点が社会における公共事業であるかぎり、次に問題となる。考えてみれば、政治経済的な経緯から、世界では例外的に長らく非軍事的に絞った宇宙開発を行ってきた国家機関で、人文・社会科学分野の検討が起こるのは必然の流れかもしれない。

実はこうした公共性を視野に入れた科学技術に関する複合的な研究は、すでに JAXA 内でも高い関心がある。たとえば、既存の分野であれば、科学技術社会論 (Science Technology Sociology :STS) やトランスサイエンスと呼ばれる分野で既にこうした問題が考察されている。この分野は、研究手法よりも「科学技術と社会」という対象を共通項として掲げた分野であると言える。他にも、対象を科学技術とする人文・社会科学分野としては、たとえば、歴史学では科学史、哲学では科学哲学、倫理学では技術者倫理、政治学では科学政策などを挙げることができるが、今後これらの知見を宇宙に適用する際には、総合的に検討するための連携が不可欠ではないだろうか。また単に宇宙に適用するだけに留まらないのが「宇宙文化学」の創造たる所以である。それは「宇宙」という対象のポテンシャルを生かすことでもありと考える。学生たちの発表やレポートはすでにこうした大きな可能性を示していた。

以上のように、JAXA が支援できる可能性があるのは基本的に「社会貢献」と「課題解決」に向けた調査研究であるが、「社会課題の解決」とは何かを含めた根本的な問いとして、あらゆる自発的研究を期待している。

4. 人材育成の展開

どのような人材を、どのように育成するのか、そしてどのような未来があるのか。ここではこの点について考察してみたい。

「宇宙文化学」では、今回やむを得ず、セクションという形をとったが、基本方針として、JAXAによる選定は極力控えたい。選別によって漏れる異質なものの中にも必ず文化の創造性が宿っていると見るからである。実際、今回、学生たちが選んだテーマはいずれも大変に興味深いものであった。ただ、神戸大学の要求水準はことのほか高く、また JAXA としても査読付き論文とするまで熟成する時間と作業が足りなかったことにより、査読なしのセクションという形をとることとなった。しかし、掲載できなかったレポートについても、学生たちの興味関心からは、いくつもの萌芽がみられる。萌芽であるばかりでなく、出典や論述のスタイル、MECE（漏れなく重なりなく）、適切な対象の絞り込み、価値判断と事実判断の峻別に留意するなど、更に練り上げることによって十分に専門研究として提示するに堪えるものとなる可能性があった。

たとえば今回は、宇宙と宗教をテーマとしたレポートが一番多く、6分の1を占めていた。このことから、文化現象のうちでも、宗教と宇宙との関係は、関心が高いことが伺え、今後このテーマに関する学術研究を進める必要も感じるが、人間の内面に関わるセンシティブなテーマでもあるため、今回は掲載を見送った。宗教学の専門研究は、価値の中立性を前提として行われる。文化人類学もまた、価値中立的に文化現象を追う。今回のレポートが中立性を保っていたか否かは評価を差し控えるが、これは難しい問題である。いずれにしても、今後もさらにそれぞれの関心を掘り下げることが願ってやまない。その他には宇宙飛行士の言葉に感銘を受けた学生が多かった。また、水問題や平和問題のような社会問題へアプローチしたものも評価が高かった。他にも日本文化の特異性をとらえたユニークな視点が提示されており、掲載できなかったものの中からも多くを学ばせていただいた。実際、どれも熱い思いが伝わってくるものである。そうした思いをいかに論述するかが、学術研究教育によって培われる重要な点である。

今後はこうした萌芽の受け皿となる道筋を示すことが必要である。宇宙開発に関する研究は、人文・社会科学分野の学生・研究者にとっても魅力的に映っていることが今回の講義を通して分かった。だが、これを専門的に研究する際、その発表機会は限られる現状がある。専門家を育てても生活に結びつけることが困難となっているという所謂「高学歴ワーキングプア問題」もある。そのうえで、あえて人材を育成するのは、市場が成熟するのを待つのでは遅いからである。また、「宇宙に関する研究をしたい」という純粋な思いに応えたいとも考える。

そこで、比較的気軽に、研究に参入することができるような窓口として発表の場を確保することを提案したい。現在既に、文化人類学者らによる宇宙開発分野における学会進出が始まっている。そうした動きに対応する学部段階からの人材育成として「宇宙文化学」は創設された。ここにはさらに、学会と学部教育とをつなぐ段階が必要ではないか。そのような観

点から、萌芽的な段階にある研究を発表できる機会を提供することを検討している。神戸大学では今後「宇宙文化学」の個人レポートおよび共同研究レポートは大学主導のもとに冊子化することとなる。これらの他に、専門研究へ進んだ学生には、JAXA 主催の発表会などで研究を進めてもらうことも考えている。この際、地域によるハンディキャップが生じないように、ネットを活用するといったこともできるのではないか。こうした機会に業績を積むことによって、研究者としての道を進んだ場合に研究資金の獲得率も上がるのが期待できる。現にいくつか、JAXA とのコラボレーションをステップとして、研究費を獲得した研究課題が成果をあげつつある。

以上のように、研究者活躍の機会を提供し、機会均等のため、遠方でも、ネットを通じた発表ができるように整備して行く。ゆくゆくは大学や研究者といった枠組みを超えて参入できるようにすることで、更に研究は活性化すると思われるが、まずは大学・研究機関連携室として出来ることを行っていく。

5. おわりに

以上、具体的に次のような提案を挙げてみた。①教養教育の展開としては、「リテラシー教育としての機能を高めること」②調査研究の展開としては、「自発的研究の促進」と「社会課題解決型のテーマの推奨」③人材育成の展開としては「ネット活用を含めた萌芽的研究の発表機会提供」と、「外部資金獲得支援」これらを連動させることによって、宇宙×人文・社会科学を開かれたものとして且つ、質の高いものとして確立させていくことができる。

このように、「宇宙文化学」の創造性のもと、できるかぎり間口を狭めずに、かつ運用可能な仕組みで、今後高い成果を上げる仕組みを構想してみたが、果たして宇宙×人文・社会科学の未来像を提示し得ただろうか。誰もが宇宙研究に触れることのできる仕組みを提示したので、少なくとも、あらゆる展開を阻害しないモデルとなっていれば幸いである。今回の講義成果実例が示すように、神戸大学・国際文化学部の学生のような優秀かつユニークな発想が効果的に表現できるフィールドとして「宇宙文化学」が根付くことを願ってやまない。